

織物の文化と産業を生かす町をめざして

——沖縄県南風原町の取り組み紹介——

Towards a Town That Keeps its Culture of Textiles and Industry Alive:
An introduction to the actions of Haebaru Town Okinawa

平良 次子

TAIRA Tsugiko

要 旨

本稿は、沖縄県南風原町の琉球絣と南風原花織という伝統織物の産地としての取り組みについて、行政や生産者の立場、観光としての産地、県内他産地やアジアの織物産地とのつながりなどの近年の動きから、「織物」を通してのその地域の人たちの活動を紹介したい。そこから、産地としてめざすもの、めざそうとしていることに何が必要かを探りたい。

はじめに南風原地域の織物の歴史を振り返り、これまでの織物産地の南風原を紹介。

その町にできた小さな「博物館」としての南風原文化センターの役割を考え、1995年に山形県で開催された「全国古代織サミット」を参考に南風原に建設された「かすりの道」を活用した「2000年南風原・アジア絣ロードまつり」への取り組みと開催の様子を報告する。それまでの取り組みの中から見えてきた産地としての誇りは、生産者にどのような影響があったのか、また生産者を取り巻く環境は、どのように変化したかを考えるために、その後の動きを紹介している。

時代状況の変化と人々の動きは、伝統産業にどのような影響を及ぼし、人々はどのように「伝統」を守ろうとするのか、活用しようとするのか。私たちはどのような立ち位置で、活動するべきかを考えながら、町の動きを記録し、紹介することでさまざまな視点から、「織物」を取り巻く地域の記録として報告する。

【キーワード】 南風原町、琉球絣、南風原花織、南風原アジア絣ロードまつり、南風原文化センター

1. はじめに

本稿は、沖縄県南風原町における琉球絣・南風原花織の生産地としての、生産の向上、あるいは産地のアピール、といったような近年の活動を通し、「伝統工芸」「織物の生産」「アジアの中の絣」「織物文化」などちりばめられた枠組みの整理をしつつ、行政や琉球絣事業協同組合、そして観光協会など地元の取り組みを紹介し今後の展望を模索するものである。

南風原町の織物には、「琉球絣」(写真1)、「南風原花織」そして、最近その位置づけを検討された戦後生まれの「ハイオ南風原織」と命名された織物がある(その種類については後述)。明治期から現在にかけて南風原が織物の産地としてその形を作っていくには、時代状況や生産のための社会構造、経済状況の変化の中でその盛衰は否めないものがあった。先の大戦を経てもなお、産地として復興できた背景には、生産者たちの協力的な地域分業体制の整備と個々人のたゆまぬ努力は当然ながら、織物産業を文化要素として、アジアの中での位置づけを試みたり、観光地として誘客する動きが出はじめ、生産者でなくても学校や地域で地元の特産品としての誇りを構築しようとしているように見える。最近はその那覇市から店舗・会社を南風原町に移し、地元で根を張りながら琉球物産品、工芸品を扱う卸・小売会社もさまざまな活動を展開し、南風原の織物生産の「応援」をしている。一般の人々の「きもの離れ」は言われて久しく、伝統織物の売り上げの低迷が続いているのに、である。日常で使用することも少ないが、その価値は高く評価し、伝統産業として、あるいは文化財としては守るべきであるという立場の人は多い。

生産者にとっての南風原の織物、生産者を除く地元の人たちにとっての南風原の織物が、どのよ

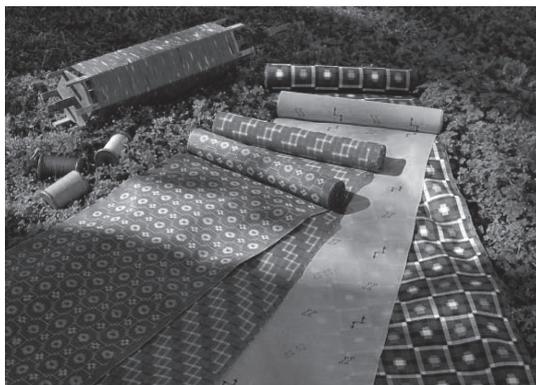


写真1 琉球絣

うにとらえられているかは大変興味深い。生活のかかった産業であるならば、生産者としての役割、付加価値を付け応援する立場であればその役割というものが見えてくるに違いない。地域には地域の人たちのつながりの中でしか実践できない面白さと苦労があり、それは良くも悪くも共有していくべき営みである、と思われる。

以下の紹介は、以前日本民具学会会誌『民具研究』134号(2006.9)と南風原文化センター紀要第12号『南風の杜』(2006年3月)に掲載した原稿を修正加筆して引用する。

2. 南風原の織物産業

南風原は、大正のはじめ頃から織物の産地として盛んになり始め、昭和初期、戦争をはさんで戦後の復興期から1972年の沖縄の日本復帰に至る頃にその生産は隆盛を極めた。今ではその時代に比べるとその生産量は落ちたものの、内外に「織物の産地」特に絣織物を量産する産地として知られている。

昭和30年から40年代の「作れば売れる」時代の人たちは、まだ織り上がらない機にかかった反物までが注文されたといい、色毛糸がはやりだし、両面花織(南風原花織)や経縞の反物が飛ぶように売れている頃は、1日に2反も織る人が出るほど、競って手織物を売り出していたそうである(写真3、4)。

しかし沖縄物が売れた1975年の海洋博をピークに次第に県外で販売された機械織りや、プリント地の安価な反物には勝てず徐々に南風原の織物の厳しい時代を迎えることになった。生産額を見ると1975年に14億円台（生産量約3万反）を記録している。地域内分業体制が確立し、量産していた地域だけにどこかが傾いたら全体に大きな影響を及ぼす。一時は800人ともいわれる織り子や従事者を抱えていたが、それだけでは生活ができないからと次第にその仕事から遠ざかる人たちが増えてきた。染めや括りの仕事をする人が減ると、織物そのものの生産ができなくなる。やがて、分業ではなく家族で一貫した工程を捌ける個人の「工房」ができてきた。現在は個人の工房と併組合で研修を終えた人たちが小グループで空き家を借りるなどして生産を続けている。2世、3世に当たる生産者は、「工夫しなければ売れない」世代になったようである。ピーク時からすると、現在は生産量、生産額とも約3分の1から4分の1程度であるという。

1975年に琉球絣事業協同組合が結成され、2年後の77年に南風原町は「琉球絣の里」宣言を行った。生産性を高め安定した販路の拡大、各種広報活動にも力を入れてきたが、近年の織物業界の低迷と厳しい経営・生産環境の流れは南風原の織物産業をも追い込んできた。

90年代に入り、生産の中心地である字本部・照屋・喜屋武をつなぐ「かすりの道」が建設されることになった。従来のアスファルト道路をタイル張りにし、絣模様をあしらったり、通りに染料となる植物を植え、小さな公園を造り憩いの場になるように工夫を凝らした。この道を歩いて行けばかすり生産のいろいろな工程を見学したり、工房を訪ねたりすることができるというものだが、個人の工房などへいきなり観光客が訪ねたりしても満足に案内できる状態ではない。理想的な企画立案は良かったが、実際道ができてはまだ、「かすりの道」という本来の機能は果たし得ていなかったと思われる。

これまで分業体制が早くから敷かれ、絣織物の生産地として戦後もいち早く活動してきた南風原であるが、近年、戦後の二、三世の時代になって全工程をこなす個人工房が徐々に増えてきた。増えてきたというより、生き残りをかけた全工程をこなす工房にまとまってきたのかもしれない。また出機（下請けの織り手）が盛んであった頃より「織り子」の意識の変化は、「生産者」から「作家」志向への傾向が出てきたのではないかと考える。「作家」意識までいかずとも、工房の特徴を出した商品が、売れ行きを左右しているようである。それは「染め屋」や「出機」で、生産をこな



写真2 琉球かすり会館



写真3 南風原・昭和30年代絣括りの風景



写真4 南風原・昭和30年代・布を売りにバス停に並ぶ婦人たち

してきた分業体制の形を変えていくことにつながった。

またここ十数年の緋組合の特徴として、理事や役員に女性が選出され、それまでの男性に取り仕切られた世界が大きく変化した。そのためか、新商品開発や助成金を利用しての新事業の展開など積極的な動きが感じられる。

3. 南風原文化センターの役割

1989年に開館した南風原文化センターの新規事業として「世界の染織物調査収集事業」の構想が立てられた。「かすりの里」としてふさわしい「緋情報・資料」の集積地、発信地になれば、と考えた。織物の生産向上に務めるのは琉球緋事業協同組合の仕事である。その生産されている織物について多角的な見方、たとえばそれを創り出す人々の生活や、技、工夫、歴史、他の地域との比較など織物を人間の生活と結びつけた文化としてとらえ、多くの人に紹介したり、調査・記録を残したりという役割は文化センターでできるのではないかと考えるようになった。

まず全国の染織物事業協同組合へ協力を仰ぎ、見本布やパンフなどの提供を求めた。全国でつくられている織物をまず知りたい。そして南風原がどのような位置にあるのか知る手がかりとしたい。いくつかの事業所からのありがたいご協力を得ることができ、少しずつ資料の収集が始まった。また県内で手に入る海外の染織物の収集、文献資料等の購入など南風原文化センターでできる染織物関係の資料収集に取り組んだ。

文化センターの企画展の折には、特に染織関係の展示資料があると興味のある人たちは遠くからでも来て下さる。地元の人たちは特に染織の従事者は布を触り裏返し、詳細に見ていく。長年織りをなさっているあるおばさんは、外国の緋織物や紋織りの実物を手にして「外国に興味はないが、この布を作っているところへは行ってみたいですねえ」と話された。海外展では、「インドネシア展」「フィリピン展」「タイ王国展」「ベトナム展」「韓国・朝鮮展」「インド展」に取り組んだ(写真5)。県内外に在住する関係者と協力して、手作りの展示会を開催し、講演会や交流会を通してたくさんの人たちと出会うことができた。各国の展示会では必ず特徴ある染織物をコレクターから借用して展示したり、染織物に詳しい人、関心のある人たちの「語る会」や海外の染織物調査などの報告会などを行った。



写真5 布織る暮らし・イカット展

「世界の染織物調査収集事業」ではインド、タイ、インドネシア、グアテマラ、メキシコへ出向き織物生産地を絞って訪問した。現地の特色ある染織物を購入し、またその関係者とのネットワークも広がってきた。

海外の染織物産地を訪ねながら、ますます自分たちの産地はどうだろうか？ 健全な生産活動が行われているだろうか？ 伝統的な織物は、その歴史や技術がきちんと継承されているのだろうか？ 現在の生活も潤い、生産者たちはやりがいを持った仕事をこなしているのだろうかなど、気になってきた。

4. 「全国古代織サミット」を参考に「かすりの里」の形をつくる

1995年山形県の温海町で「全国古代織りサミット」というユニークな催し物が開催された。関川という47戸の集落では、古来より「シナノキ」の樹皮で織られる布の「しな織り」が生産されている。その工程を各家々で実演、展示しているのだ。その小さな集落を散歩しながら見学ができ、織り体験や買い物もでき、小川でも繊維の洗濯作業風景が見学できた。そこには何と1000人近くの人が全国から集まり、賑やかなひとときであった。大きな農家はサミット会場になり、実演のない家は、青年会などによる飲み物などの気の利いたバザー、少し大きな集会所ではホールで、全国の「古代織り」といわれる植物繊維でできた織物の紹介の展示。面白い企画であった。その催し物が、ヒントになり「南風原・アジア絁ロードまつり」の形を思い描かせた。

その後、南風原でも充分このような催し物ができるのではないかと考えるようになり、関係者と雑談の中にもいろいろなアイデアを出し合った。南風原町にも「かすりの道」がある。それを生かせる。また、アジアなど絁を生産する地域の染織物も収集しつつあった。これからの伝統織物の生産者にとって、あるいは「染織物」を特産物とする地域の生産活動や経済活動にとって大切なことは何なのか？ 生産者ではないが、織物ファンは多い。研究者や収集家にとって、染織物生産についての課題は尽きない。その現状と課題を探りながら、伝統的織物の行方と、生産地の人々のつながりを考えるようになった。

5. 「2000年南風原・アジア絁ロードまつり」への取り組み

2000年は、南風原町の町制施行20周年に当たる年であった。それまでに「世界の染織物調査収集事業」でインド、タイ、インドネシア、その他さまざまな染織関係の「場」で出会った人たちのネットワークも生かしながら、その年の町のまつりに標準を合わせ、「かすりの里」としてどんな目的でどんな形の取り組みができるか、実行委員会、関係者と取り組みの相談が始まった。

まず例年行われている「ふるさと博覧会」に南風原町制施行20周年記念事業として位置づける催し物を開催することにし、会場を「かすりの道」を中心として近隣の施設を利用するが提案された。かすりの道の使用は絁織物業者の各工房や自宅の周りなど、普段はよその人が通らないような路地までがまつりの会場となる。おもしろい動きになるのではないかと。

「かすりの里」として織物についての情報を発信し、国内のみならずアジア各地に広がる絁について「人と技」が交流し、お互いの手仕事を続けられるような関係を構築できないか。織物は世界各地にある。つながる理由がある。可能性が広がる。

とは言え、あくまでも主体は絁の生産者である。生産者が納得のいくものにしていかなければならない。生産者が現在どういう状況にあって、何をめざしているか、私たちにどんな手助けができるか、必要か。絁織物に興味のある人たち、ない人たちも含めてその伝統の技と文化をいかに伝えるか、伝統工芸産業として、あるいは最近若い人たちが手がけたオリジナルの商品開発をどのように発展させるか、課題は山積していた。

まず、「布に関わりのない人はいない」という原点から考えると、多くの人間に関わる。生活の中で布を、特に地域の伝統織物を楽しむ方法を探りながら、もの作りについて考える機会にもしたい。つくる人と買う人を繋げていく楽しみもある。そういう機会にしたいということをもっと生産者に伝え、内容やタイトルなど、一緒に計画をたてていくことになった。事前の皆さんからの助言や相談の中で、まつりの開催に理解していただき、実現できる運びとなった。

6. 「2000年南風原・アジア絣ロードまつり」の開催

2000年11月、「南風原・アジア絣ロードまつり」は従来の「はえばるふるさと博覧会」と2年に一度の「福祉まつり」も併せての開催となった(写真6)。開催は11月3日～5日。かすりの里としての催し物を記念イベントとして開催するために、琉球絣事業協同組合を中心に、役場の商工担当、文化センターの職員で実行委員会を結成し、まつり開催の確認、具体的な部会の設置、アジア各国の技術者の選定と交渉、諸手続などのため、実行委員会は2年程前から結成し、周知を呼びかけその気運を高めるようにした。たくさんの理解者と多くの皆さんのアイディアを集める事がいかに大切であるかしみじみ思った。

11月3日は記念講演とフォーラムのみで、実演や従来のまつりの開催は4、5の2日間となる。「南風原・アジア絣ロードまつり」としては、次の1)～4)が柱になった。

1) 「かすりの道」の活用

数年前にすでに建設されていた琉球絣の生産の中心である喜屋武、照屋、本部の3部落を通る「かすりの道」を会場とし、その周辺にあるかすり会館、児童館、広場、中央公民館を利用する。そこは、アジア5カ国(インド、インドネシア、タイ、フィリピン、ウズベキスタン)の織りの実演や展示、アジアの料理や民族音楽、舞踊などの公演、端切れ市などを行う。隣接する工房では地元の琉球絣の生産工程を披露、そして一般客が体験できるように染め・織りの体験コーナーも設置した。時間を決めて、工程を見学できるように案内役を置いて回るコースも決めた。普段は静かな住宅街であるが、まつりの2日間は数多くの一般客が通りを歩く。それならばとばかり車庫を利用して、飲み物やサーターアンダギー(ボールのような砂糖菓子)などの販売を計画するグループも出た。軒下に、あるだけの絣のきものを下げて展示して下さいともお願いした。沖縄でも唯一といわれる「織機製作所」も数々の織物道具を展示したり注文をとったりした。

海外の実演に関しては、まず実演者の選択、手続きに時間がかかった。フィリピンは、本人たちのパスポート取得のために1年もかかり、出生証明書、結婚証明書などの作成からで、神奈川県でフィリピンとのパイプ役を務めておられる方々に多大なご協力をいただいた。タイの実演者はいろいろな事情により、4回も変わる事になった。それぞれの荷物の輸送や書類の手続きも、なかなか

スムーズにはいかない。それでも遠く離れた村々の同じ絣生産者を迎える事で、期待は大きかった。

●南風原町制施行20周年記念事業●
Haebaru Town Project to Commemorate the 20th Anniversary of the Township

南風原・アジア絣ロードまつり
HAEBARU-ASIA KASURI ROAD FESTIVAL ~伝統を今に活かすために~
for the Revival of Kasuri Traditions

日時 DATE
平成12年11月3日(金)～5日(日)
November 3 (Fri) ~ November 5 (Sun) 2000
(第9回ふるさと博覧会・第7回福祉まつりと同時開催)

場所 VENUES
南風原町中央公民館・かすりの道・かすり会館
Haebaru Town's Hall, Kasuri Road, Kasuri Hall and so on.

事業内容 PROJECTS

- ★記念講演(11/3 2時) 国立民族学博物館教授 吉本 忍
COMMEMORATIVE LECTURE: National museum of Ethnology Prof. Noboru Yoshimoto
「かすりの道」の発展 - テーマ「伝統を今に活かすために」(11/3 3時)
KASURI FURUJI with the theme of "For the Revival of Kasuri Traditions"
- ★展示会及び実演会(11/3～5) 絣織りの実演(11/4・5)
EXHIBITION AND DEMONSTRATION OF WEAVING
EXHIBITION OF KASURI WEAVING AND KASURI WEAVING DEMONSTRATIONS
- ★デザインコンテスト・ファッションショーの開催(11/4・5)
DESIGN CONTEST AND FASHION SHOW
- ★インド・インドネシア・フィリピン・タイ・ウズベキスタンを種別実演で招待。
自主参加でカンボジアの絣展覧会も開催
Kasuri related people from India/Indonesia/Philippines, Thailand and Cambodia are invited.

主催 南風原・アジア絣ロードまつり実行委員会
Haebaru-Asia Kasuri Road Festival Executive Committee

連絡先 南風原町企画課 電話 901-1111 沖縄県南風原町字東216 716 Kazuyaruku, Haebaru, Okinawa 901-1111
TEL. 098-888-7172 TEL. FAX 098-888-7399
E-mail: haebaru@city.haebaru.okinawa.jp
南風原町企画課 電話 901-1112 沖縄県南風原町字東157 157 Motoba, Haebaru, Okinawa 901-1112
TEL. FAX 098-882-6677

写真6 南風原アジア絣ロードまつりチラシ

2) 記念講演、フォーラム、染織レクチャーの開催

記念講演には、国立民族学博物館の吉本忍氏に、「アジアの絣・世界の絣」というタイトルでお話いただき、絣という織物の特徴、歴史的伝播の紹介、機の原理など多岐にわたってお話をいただき、特に「伝統は常

に革新的である」という内容のお話は、伝統織物を作り続けている南風原をはじめ各地の生産者にとって、刺激的な講演であった。

フォーラムは2部に分かれて行い、1部では「南風原からの声」と題し、沖縄県立大学教授の祝嶺恭子先生に琉球絣の歴史について研究者の立場からお話をいただき、地元の生産者を代表して大城一夫さんから現在の状況や課題、消費者の代表として花城一美さんから発言をしていただいた。2部では「アジアからの声」と題し、5か国5人の方から報告をいただいた。インドはパドミニ・バララムさんが国の隔たりなく、いいものはいいものとして売れるマーケットの確立を呼びかけ、インドネシア在住のマリ子・スルジャントさんは、伝統的な染織の技術を駆使していいものを作り続ける指導と、今に活かすための商品開発と提言。フィリピン大学のノーマ・レスピシオさんは伝統技術保持者の認定や調査記録の重要性のお話、タイのスイチャイ・スマンチャットさんはタイの王妃が地元の織物を大切にされ活用していることが国民にとって、伝統織物の価値を高める気運につながっているというお話、そしてカンボジアからは、森本喜久男さんに戦後の染織物の生産の危機の状況と、そこから抜け出すための活動報告をしていただいた。

2日間中央公民館の1室では、染織物レクチャーを連続で8コマ行った。せっかく各地の研究者や生産者が集まってくるので、それぞれのテーマでスライドやビデオ、織りの実物などを使いレクチャーしていただいた。毎日の生産活動の中で、なかなか他地域の織物生産の様子を視察したり、自分たちの伝統工芸の歴史を学んだり、今後の展開について語り合ったりする機会は少ない。南風原の生産者にとっても、一般の参加者にとっても良い機会となった。しかし実際には南風原の生産者はまつりの各担当部署の仕事に追われ、じっくりレクチャーを聴いたり見学したりできなかったことは反省点である。

その後その内容は『記念講演・フォーラム・染織物レクチャーの記録（2001年3月31日）』として報告書にまとめられた。

3) デザインコンテスト・ファッションショー

絣織物のデザインは、現在絣を括る人の絵図台の上でつくられているようである。技術のある人たちは、伝統柄を組み合わせて、数え切れない程の柄の琉球絣を生産してきた。柄には流行があり、問屋さんに注文された物がほぼ数多くつくられているようであるが、創作的な物は数少なく、あるいは個人からの注文による物はほとんど聞いたことがない。かつて、芸大の学生からデザインの提供があったが、断ったらしい。南風原ではかつて多くて10反も同じ柄をつくるので、1反つくる手間暇も10反作る手間暇もかわらず、10反分の作業をする方が能率的、効率的である。残念なことに個人で使う1反の注文を受け、製作できるゆとりはなかったようである。値段の問題もある。それなりの値段でもかまわないという発注者もあろうが、つくる側はそれなりの値段設定がしづららしく値が上がると買わないのではないかと心配する。金額設定については当然かなりシビアである。

従来のデザインコンテストやファッションショーでは既成の絣の反物を利用してしたが、そこでこのまつりを機に、着尺の新柄と、洋服用の柄を製作してもらうため、例年より4ヶ月ほど早くデザインの公募に入った。絣組合では「新柄製作受け入れ部会」なるものを10数人で作って下さり、一般の方々が希望する絣のデザインを審査の上、布に製作するという事をお願いした。紙1枚に描かれた絣の柄は、技術者にとって、これまで見たこともないような、絣では無理だというような物まで出品されていた。作品を前に「これはよほど手間暇がかかる」「できないことはないが難しい」という反応もあった。しかし着尺用新柄38点の内13点、洋服デザイン33点の内10点が一

次審査で選ばれ、合計 23 点が、布に作られることになった。その打ち合わせの時は一番感動的であった。それはデザインした人と、熟練の職人たちとご対面し、絵が布になっていく瞬間で、お互いに妥協をしながら、時には押し通し、新しい布づくりへの挑戦の瞬間であったからだ。ある布製作者は、「高校生ながらいいデザインを作っている。今後の参考になる」と喜び、根負けをした人は、「難しいけれど、頑張ってみる」と意気込んだ。このまつりの目的はそこにもあった。伝統と現状に甘んじず、常に挑戦する絣織物の生産地でありたい、と希望を掲げた。

4) アジアとつながる

絣は沖縄各地で生産されている。日本各地でもその伝統を誇り、大切に受け継がれている。産業としての生き残りが難しい中、手作りの味わいを求める人たちに支えられその希少価値も保たれているものもある。

絣といえば、インドのアジャンタ石窟に描かれた絣模様や、インドネシア、フィリピン、沖縄、日本、そしてヨーロッパや中南米にもその広がりを見せている。特にアジア地域にはその地方独特の柄と素材で、鮮やかな絣織物の生産を今でも続けている。糸を括って染めその括りはずして出た柄の組み合わせで作る経絣、緯絣、経緯絣の豊かさを我が南風原の町で満喫できるように、各地の絣織物を集めたい。しかも実演をしてもらい、見て楽しむばかりでなく、技術者同士の交流も可能である。その機会を持てるように準備をした。

まず、絣といえばインドのパトラ、インドネシアバリ島のグリーンシンという経緯絣の双璧、フィリピンのアバカで作った経絣、タイの色鮮やかな緯絣、そして芸大の柳悦洲先生の紹介で、中央アジア・ウズベキスタンの絹経の縞子織（実際には平織の実演となった）を招待することにし、人選や諸手続を始めた。カンボジアについては沖縄での展示会を予定していた森本喜久男さんに自主参加という形でお願ひし、実演は残念ながら直前の都合で実現しなかったが、滅多にお目にかかれない



写真7 パトラ織

カンボジアの布や商品が、南風原で展示された。

盛りだくさんのメニューになったので、かなり時間の制約があったにしる、南風原の絣括りの熟練の職人たち数人が、インドのパトラ製作の会場に（写真7）、括り方を習いに来られ、自分たちの技術と比較して学んでいた。経糸と緯糸を交互にあわせて織っていくという一致した原理であるが、国によって機の形がちがいで道具のちがいもあって人間の工夫の多様性を思わせた。

7. まつり後の地域の動きと取り組み

1) 女性たちの活躍

「南風原アジア絣ロードまつり」の取り組みで、特筆すべき事は、女性たちの積極的な動きであった。まつりを盛り上げるための労力を惜しまないばかりか、次々とアイデアを出し取り組んでくれたことである。それが絣組合の中で目立った。絣生産者の中で、職種からすれば織り子が一番多く、織り子となるのは圧倒的に女性であるにもかかわらず、当時理事には女性が一人もいない。何十年も絣織物を織り上げてきた人が、自分の織った物がどれくらいの値段でどんな人に売買されているのか、最終的に消費者がどのような感想を持って使ってくれているのか知らない構造と

なっていた。

実際にこのまつりではるばるインドネシア在住の県外出身の女性が、以前に南風原の緋の反物を購入し、まつりへの参加ついでにその反物を織った人に会いたいと訪ねてきた。さっそくその織り子である方を紹介し、ご対面をしてもらったら買った方が大変喜ばれていたもので、作った方が驚き「何十年も織りをしてきたが、買ってくれた人からお礼を言われたのは初めてだ」と話していた。その後もいろいろな物を送り届けるといったおつきあいが続いているそうである。作った人と買った人の顔が見えるような物の流通を双方とも本当は求めているはずである。いい出会いであった。

つまり南風原の緋織物生産は、産業であるだけに男性中心に動き、これまでなかなか女性の声や要望は出る幕がなかったのかもしれない。しかしこのまつりでは、端切れ市の開催、緋を使った小物のデザインコンテスト、新商品の開発・販売など活発に動いた。その動きがまつりの後、緋組合の理事に女性が8人就任することとなり、組合に女性部を結成したり続けて新商品の開発に手がけたりしている。

女性部ができたことで、バスを貸し切り他の施設や事業所を視察に出かけ、展示会の見学へ出向くなど楽しそうな活動を展開している。女性の機動力には男性組合員も圧倒されている。理事長に「緋組合の発展は女性たちの力そのものだ」と言わしめた。今後より活発で着実な活動を重ねていくに違いない。

これまで同じ南風原で工房同士、どのような緋を生産中かなどあまりわからないまま直接問屋さんと取引しているようであった。検査をするために反物を組合に持ち込むが、その時に一部の人が見られるくらいで組合へ委託販売をしない業者のものは地元の人であっても目に触れることはない。第三者の私たちからしても何だかさみしい。作品（商品）の品評会をして、お互いに切磋琢磨するような、お互いの技術を共有する関わり合いで、地域の織物産業を支えられないものかと思っただが、それは各工房・業者として「商売」を成り立たせるためにはなかなか持てるゆとりではなさそうである。その辺りの今後の組合の課題がありそうである。

2) 端切れとB反

端切れ市は、それまでタンスの奥深く眠っていたB反の製品を切り売りするといった取り組みであったが、洋裁や小物手芸などをされる方到大変好評で、市を出す前から予約が入ったりした。売る人にとっても、無駄な布にならずにすみ、買う人もその時を待っていたとばかりに大分売れたと聞く。その取り組みはその後も毎年まつりの恒例となった。ただ、B反がよく売れるというのは問題視されたりした。正反（検査をパスした製品）が売れて欲しいが、さほど変わりはなくともB反はB反である。値段を安め、メートル売り（切り売り）をしてくれるのだから、必要な分だけが手にはいるので喜ばれる。売れるからといって、B反をたくさん売ろう、というのでは地域の伝統産業の腕が泣く。思い切り切り売りできる正反も生産してはどうか？ という提案もあり、組合では苦慮している。実際他府県の緋で正反を切り売りしているところがあると聞く。流れを良くするいい方法はないか。

3) 「デニムの緋」

まつりの後、特に脚光を浴びていたのは、デザインコンテストで入賞した人の新しく開発した「デニムの緋」であった。デニムといえばジーンズである。木綿の太糸を斜紋織りにする。それに緋模様を入れる。その作品が選ばれ、いよいよ作り手の分担の時、それは特殊な織りになるためなかなか手を挙げる人はいない。その中で親子3代で、織物を生産している工房の孫息子が手を挙げ

た。20代の若手ホープである。彼は伝統織物の工房にいながら、斬新な現代っ子風なファッションと、他の国の織物や布の素材にも関心を寄せ積極的に学習し製作に励んでいた。彼の挑戦意欲がまつりを機に新しい琉球絣を展開した。「デニムの絣」さらに「毛糸の絣」を作り上げ、服のデザインをした人を喜ばせた。こだわりの作品は、ショーでも注目を浴び、大手メーカーから注文をとることになったのである。

4) 織物の文化財指定・伝統的工芸品指定と保存会

絣ロードまつりの前 1998年、南風原で生産されている絣以外の組織織、「南風原花織」が沖縄県の伝統的産業として認定された。花織の種類も多様であるが、古くても130年程前から製作する技術が南風原にあったことが確認されている。その後も昭和30年代に飛ぶように売れた色系との組織織も、南風原の名を内外に広めた。しかしながら、「花織」は近くの首里や読谷で生産されているため、南風原産のものとして出荷できずにいた。「南風原花織」の伝産指定は長年花織を生産してきたお年寄りを大変喜ばせた。その後、琉球絣と南風原の花織を町の文化財指定に向け、あらためて自分たちの織物産業の調査記録をするため、「琉球絣と南風原花織保存会」が結成された。これまで沖縄一の織物の産地として発展してきたが、生産に追われその歴史や技術を記録に残すことが遅れていた。行政と力を合わせて、南風原の織物の隆盛期を知る人が存命のうちに調査・記録、そして文化財に指定しようと動き出した。年配の方々も、聞き取り調査に加わり、大先輩たちの話に耳を傾けた。伝承されている染め織りに関する知識や体験、変遷など長年織物生産に携わってきた人でも新鮮な話であったようである。先人たちの努力や工夫に目を向け、記録に残し意義を再確認した。「保存会」を中心に、自分たちの織物産業のこと、他の織物、繊維についてデザインについて、流通についてなどあらゆるテーマで学ぶ機会を作ることができる。

組合が毎年募集する後継者育成の研修に町外からの希望者も多かったが、近頃は南風原からよそへ嫁いだ娘が、実家の家業を見直し、あらためて染織の仕事を始めたり、婿たちが加わったりと地元の人たちの後継者意識がいくらか高まってきたようで、関係者を喜ばせている。南風原の町が「絣ロードまつり」を通して得たネットワークや体験を活かしつつ、「織物」を媒体にして人や産地が結びつく拠点となれることを願いたい。



写真8 大城幸正作品

5) 振袖製作の試み

織物生産はきもの文化に直結していて、おしゃれにきもの魅力を宣伝されても、なかなか一般庶民には、簡単に手に届くところがない。とはいえ、成人式や卒業式など特別な節目にはやはりまだきものを装う文化が残っている。南風原町で毎年開催される成人式に振袖をまとう女性たちには、ポツリポツリと、自家製の絣や花織のあしらわれた振袖を着ている人たちがいた。その人たちのように、この記念すべき節目に地元産の振袖を着る人たちでにぎわったら素敵だろうなという希望を抱いていた。

そこで、文化庁の助成を受け、10着の成人式にふさわしい振袖を製作することになった(写真8、9、10)。製作者は町内の染織物に携わるプロたちである。好みの柄と技法で、それぞれの成人者に対する思いを込めて、振袖にタイトルと

メッセージを添えていただいた。振袖一つ一つに個性を刻みたくったからだ。そして着る人にも何らかのメッセージが届くと製作者の顔が見えて面白いのではないかと考えた。出来上がった振袖は、思いのほか若者のたちに人気で、期待した成人式ばかりでなく、大学の卒業式、結納、祝賀会、授賞式など、様々な場面で着ていただいている。数があれば、ユニークな柄があれば、きものや振袖を着る機会を待っている若者は少なくないと感じた。そのうち、男性用の袴も作ってほしい、帯も製作してほしいなどの要望も出た。生産者もニーズに応える努力が要求されているようだ。

6) 腰機体験

小学生たちは、地域の特産品を授業で学ぶ。南風原町は「かすり」について、かすり会館や、南風原文化センターに資料を求めてやってくる。最近のかすり会館でいろいろな種類の絣コースターの製作体験ができるようになったので、子どもたちだけでなく観光客にも人気のようだ。

かつて南風原文化センターで、織体験を子どもたち向けにやったことがあった。指導して下さった小学校教諭は、卓上でできる簡易織り機に挑戦させ、子どもたちに織物の原理を学ばせる。現在でも授業と呼ばれ、子どもたちは四苦八苦しながら、毛糸を使ったコースターづくりをする。経糸の張り方、綜統の役割、糸の張り加減など忍耐強く体験することができる。

簡易織り機は授業時間を使って行われるが、腰機の体験はなお時間を要し、卓上ではなく、腰を中心に体中を使って行うため、なかなか根気がいる(写真11)。しかし指導者にお願いし道具をそろえ、希望者を募ると小学校2年生から中学生まで、それぞれ数週間かかっても2~3メートルほどの帯を仕上げることができた。

簡易織り機、腰機ともに、体験した子供たちは、かすり会館での高機による織体験がスムーズだと聞く。子どもたちにも興味を持たせて体験できる機会を作ることが大切だ。

織体験は、製作者にならずとも、染織物製作に対する理解者を増やすことにつながると理解している。



写真9 ふりそで展



写真10 大城一夫作品

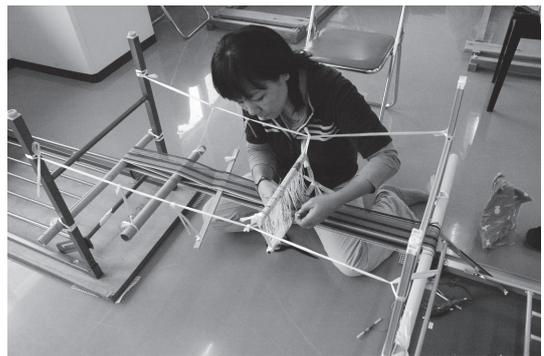


写真11 腰機体験



写真 12 リレー展



写真 13 かすりの道案内

7) リレー展

絣織物の生産地であっても、よその工房がどのような柄のものを出荷しているか見る機会がない、とか小学生たちが、自分たちの町の特産品を「琉球絣」と学習しながら本物を見たことがないなどの声を耳にした。まず地元の人が地域の特産品を見る機会を作りたい。かすり会館に展示されているもの以外の反物のたくさんの種類の織物が南風原の特産品として商品化されている現状がある。そこで工房ごとにリレーをし、他の工房の人たちやもっと町民にも見てもらえるように「リレー展」を開催することにした(写真12)。不定期での開催だが、町内工房の方々のご協力をいただき、できる時にできる範囲で各工房の染織物の商品を展示している。各工房1、2点の少ない出品で開催される大きな展示会と違って、個人工房の展示会は、その工房の特徴が出たり、柄の多様性が見れてそれなりに充実する。製作者は他の工房の作品を見ることによりお互いに刺激しあえると展示会後に話していた。

8) 「かすりの道」盛り上げ隊と、観光協会の取り組み

2013年4月に発足した「一般社団法人南風原町観光協会」は、かすり織物生産地域を結ぶ「かすりの道」を活用するため、「南風原町かすりの道ツアーガイド」の取り組みを行っている。1994年に生産地を結ぶ舗装道路をかすり模様やモザイクタイルで敷き詰めた「かすりの道」が建設され、周辺の工房の紹介、かすり模様を塀に描いたり、ツアーガイドをすることで「観光」の視点から集落内の紹介と併せて絣織物をアピールしている。

また観光協会は地域の人たちと共に「かすりロード盛り上げ隊」をつくり、かすりの道の植栽や、維持管理にも取り組んでいる(写真13)。

絣織物について多方面からの応援が以前より増してある。それは生産に直結するものではないにしろ、伝統織物への地域の人たちの見直しや誇りにも繋がり、少なからず生産者と地域の人たちが織物を通じた活性化がみられる。

8. おわりに (大きな課題)

地域の人たちは「伝統的」という言葉に弱いように思う。壊してはいけない、引き継がなければならない、掘り起こしていかなければならないという気持ちがある。一方で新しく作り上げる文化的想像力も、エネルギーもパッションも人々の心を捉えやりがいが生まれる。例えば地域に伝わる年中行事の慣行のために、毎年同じことのくり返しでありながらその年に関わる人、その時の状況や事由で何らかの変化が少なからずあるはずだ。しかしながらちがう状況で、同じ唄や踊り、衣装、道具などを何十年も続けるというのは、大衆が大きな綱のようなものにひとつに絡められ目指すところへ一緒に動くというような方向性を持つ「地域の力」に見える。

それは伝統工芸にも言えるのではないか。往々にして若者はやはり新しいものを作りたがり、個性的なものを表現しようとする。何年もそうしていると、かつて先輩達がこだわっていたものが気になり、見直して、それに挑戦しようとする。そこにあるものの継承されてきた歴史や関わった多くの人たちの力を感じるようになるのではないか。そこに触れた時もっと大きな力を得ることができた喜びとなるように見える。そう話している熟年の方は、南風原でも先輩達の作ってきたものについて、あんな難しいことは我々にはできないと言いながら、いつしか挑戦している。そういう挑戦が「伝統」を育てている。

そしてそんな営みを織物生産者ではない人たちが、一生懸命に応援しようとしている。生産高の盛衰はあれど、「伝統をつなぐ」意識は尊ばれているように思う。

近頃の南風原産地では、「琉球絣」に次いで、「南風原花織」を伝統的工芸品として国の指定に向け、申請書の用意をしているところである。まず資料をまとめるにあたり、あらためて実感したことが多々ある。生産者にとって必要なことは、何よりも製作できることが重要である。人聞きが多く一度習得したら体が覚えているので、何十年も製作できる。子や孫にも伝承できる。それが販売できるのならそれで生活はできるのである。ところが、指定のための資料収集やまとめとなると、「南風原花織」という枠組みの中で組織織の種類と、独特な数多くの名称の整理が必至である。それまでにその技法と種類の整理が一様になされていなかったこと、一つ一つの織り方についての特徴や技法が活字になっていなかったことが、「南風原花織」についてまとめるのに時間がかかっている。ここに至るまでに「南風原花織」生産に資料整理が必要がなかったのだと考えられる。伝統織物の技ばかりではなくその記録を残す意味では、いい機会になっていると思う。地域の誰かのメモや記録、文献等の資料発掘、伝承の系譜の記録、聞き取り調査など、すべてが織物の技を伝承する人を通しての継承とは別の作業が必要となってきた。それが大きな課題である。

さらに新しい動きもある。地域の織物業に携わってきた、3世、4世の世代が若者が集まる交流を始めたことである。これまで、太く強いパイプで南風原地域の織物産業を支えてきた本土業者の力ばかりでなく、自ら本音で語り合い、何とか自分たちの仕事が発展できるよう集まって話し合いをするようになってきたのだ。それに加え長年個人で織物の素材にこだわり、ついに1個の繭糸で布を織り上げた、「あけずば織」の上原美智子さんも地域の人たちと対話しはじめた。究極の布づくりと、地域の伝統織物の生産者が新しい布づくりの世界を切り開こうとしているように私には見える。私にできることをできる位置から関わっていきたい。

織物づくりを通しての人々の関わりには、地域の役割の深さや広がりを生む。「伝統」を守りながら、常にその時代にかかわる人たちの創造性が加わり、ますます魅力を増す。生産者だけでは作れない織物生産地の魅力をこれからも探していきたい。

参考文献

『民具研究』134号

『Textiles Across The Seas』2004. 3. 31「織りの海道」実行委員会発行

『南風の杜』南風原文化センター紀要第12号 2006年3月